

平成 22 年 3 月 30 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007年度～2009年度  
 課題番号：19520221  
 研究課題名(和文) 世紀転換期ドイツの「生」の言説と「文化」の言説  
 研究課題名(英文) The discourse of the life and the culture in the turn of the century  
 in German Area  
 研究代表者 金子 元臣 (KANEKO MOTOOMI)  
 大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
 研究者番号：10081605

研究成果の概要(和文)：共同体や国家という枠組みの中で、個としての人間に先立ち、身体・生・生命というレベルでの関係性を知の対象とした動きが強まり広がっていくが、ドイツの世紀転換期、「生」(Leben)「生活世界」(Lebenswelt)と芸術や文化との関連をめぐる創作、運動が展開された。そこでは「生成する世界」へ、「現実」の認識へと知の転換が促進され、「生」とは「力」の作用だと捉えられ、「剥き出しの生」であるゾーエーの解放に、類としてのヒトの自由と幸福をかけるという現象が起こった。

研究成果の概要(英文)：The movement that the intellect intended for a level called a body and the life was gradually strengthened. At a German century turning point were developed the exercises and creations about the connection with the life or the life world and the art or the culture, therefore switch of the intellect to "the world to generate" or to "the experience world" was promoted. It was thought that the life was action of power and that it guaranteed freedom and the happiness of the person as the kind to free "bare life".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ドイツ、世紀転換期、生、文化

1. 研究開始当初の背景：本研究の主たる眼目は、「社会理論」と「文化研究」を結びつけることにより従来の世紀転換期ドイツの文学・芸術研究の活性化を図ることである。従来の研究は個々の課題を個別的に分析し記述してきたことにより、この時期の文化史

的特徴が十分に解析されて来なかった向きがある。この時期の現象は「複合性」「非同一性」に立脚するものであるが、本研究がまず検討するのは、同時期の「芸術」「文学」に関する複合的な言説の発生と1871年のドイツ帝国の政治・社会が分節する「社会」「文

化」を対象として、そこに見られる「生」作用とある種の言説編成や制度・組織、運動との結びつきである。文化研究と社会理論上の成果とをむすびつけることにより、とりわけ19世紀後半芸術・文化の領域のみならず哲学等の学や知の領域を含めた広範囲にみられる「生」の言説の影響史に新たな系譜学的考察を加えることができると考える。つまり「生」作用の系譜を探ることにより同時期の社会の編成を背景とした「文化」をめぐる言説が、人間の経験的世界こそがあらゆる理念と意味を構成する源泉だとする言説を形成するなかで、19世紀後半からのヨーロッパにおける形而上学的「知」の構造的変化をもたらして現象していたことが明らかになると考えている。「知」の構造変化としてあらわれたパラダイムの革新は、「社会」を所与のものとして受け取るのではなく、構成主義的にとらえて理解していく方向へと道を開いた。そのことにより、産業資本主義社会の進展と同時に進行していた「大衆化」の波に抗して、そしてさらに「文化」を本質主義的なものとして理解しようとする言説を一方で解体しながら、むしろ文化とは、「競い合い、一時的で、不意に現れるもの」をふくみながら抗争し流動する場であるという受容の可能性を開いていった。そこには「生」とは「力」であるという認識が深く作用していたと思われる。

2. 研究の目的：世紀転換期に噴出した「文化」にかかわる「熱い」現象は、19世紀後半からのヨーロッパにおける「知」や「学」の構造変化と深く関わっていた。本研究の主たる眼目は同時期のドイツ・オーストリアの文化・芸術に現れた伝統との断絶、革新にかかわる現象に作用した、同時期における「知」と「学」と「生」の相互作用を明らかにすることである。この相互作用を根底に持つことによって同現象が精神世界の諸活動の極めて広範囲な領域を対象にして広まったこと、言葉を換えれば領域の違いはありながらその根底に、ある共通した志向・テーマがあったことを明らかにすることが出来ると考える。そして本研究の中心的テーマを簡潔に述べると、かつて超感性的世界にあった理念態が現実的实践に還元され、「生」の律動を根拠とする人間の意識作用の意味構成力が、あらたに社会的に形成されてくる「文化」や「制度」という領域へと導入・受容されていくという形而上学的「知」の構造変化にかかわる現象を系譜学的に分析し記述していくことである。

3. 研究の方法：本研究は「言説」を主とした研究対象とするため、より多くテキスト化された資料の収集・確保とそしてその分

析・整理が中心となる。その際対象となる資料は芸術・文学の領域に留まることなく社会・歴史や思想・哲学を含めたものとなる。研究期間の前半では主として「生」「生命」をめぐる言説の収集と分析を行うこととした。それまでの生物の連鎖という連続性の言説に断絶の言説がもたらされる等、19世紀において「生」「生命」をめぐる言説は大きくその編成を変える。19世紀後半における、例えばニーチェ、マッハ、フッサールらの現象学的な展開は、この「生」をめぐる言説編成の変化を「知」の構造として全体化していく。これの分析が本研究期間全体における中心課題となる。さらにこの現象を個別ジャンルの、文学・演劇のみならず絵画などの造形芸術、さらには美術工芸と建築、精神科学、とりわけ哲学・思想史という領域でどのように主張され、言説化・様式化されていったかを分析するという形でおこなう。

4. 研究成果：17. 18世紀以降共同体や国家という枠組みの中で、個としての人間主体に先立って、人を生命体としてとらえ、身体・生・生命というレベルでの関係性を知の対象とした動きが政治・経済のみならず、ドイツの近代社会の構制の極めて広範囲にわたって起こっていた。それは市民社会、都市、市場といった領域を舞台として、性、健康と病、死、さらには出生率、人口、衛生、安全、福祉、戦争、そして家族、国家、社会、民族、若さ等々といった課題の根底に、「生」「生命」に関する「知」が作用し、またそこで新たな知や政治的・経済的、また社会的な操作手法やシステム・制度が形成されてこれらの動きを促進し複雑化していくという現象である。もちろんこれらの動きは必ずしも一連の動きだというのではなく、いくつかはそれぞれが別々に起こっているが、しかし現象的には、何か近いもの、共通性をもっていて、政治、経済、社会、文化という、それぞれの領域における個別性と共通性を分析する必要があった。特にドイツの世紀転換期、「生」(Leben)「生活世界」(Lebenswelt)ととらえられるものと芸術や文化との関連をめぐる主張、創作、運動が、絵画、工芸、建築、文学などの極めて広範囲な領域にわたって、それまでの伝統から離れ革新していくものとして展開される。この現象は、その現象の伝統との断絶をはらむ強さのゆえに、「存在する世界」ではない「生成する世界」へ、「現

実」の認識へと向かう経験的「知」へと地滑りの根的な知の転換を促進したことを顕著な特徴としていた。そして世紀転換期の「文化」の特質であるこうした「多様性」「複合性」という現象は、「力」の作用としての「生」というものの表れとして捉えられた。世界をいったん「意識性」「主観性」を媒介することで構成する、あるいは「意識性」「主観性」に還元することで構成し、「客観性」概念に修正を加え、そのことによって「世界」はまさに生成されゆく「生」の「現象」として多義的に出現するという思考が、「知」の出発点におかれるようになる。つまり世界は、何らかの超越的な真理の秩序に還元されるのではないということ、目の前にある現象のありようが重視されるようになる。「絶えざる流動の中で永遠の生成と消滅を繰り返している」という世界、つまり簡潔に「生成する世界」、これがいわゆる「生」「生活世界」であるが、「生成する世界」という言い方には、そこにある作用がはたらいていること、「力」の作用が見て取られていることが示されている。「生」とは何らかの「力」である、あるいは力への意思である。この一種生氣説的な認識が世紀転換期の様々な動きの根底に働く。既に触れたように世紀転換期の「文化」の特質である「多様性」「複合性」という現象は、まさにこの「力」の作用としての「生」というものの表れとして捉えられる、あるいは生に還元されることで、関係づけられ、意味を獲得し、価値づけされた。

さらにとりわけ世紀転換期、サブカルチャーの領域で典型的に現れる人間の身体的なもののパフォーマンスな運動を創造のメディア化する動きは、いわば生命体としてのヒトという即物的なレヴェルを機能させ、言葉をかえると「剥き出しの生」であるゾーエーの解放に、類としてのヒトの自由と幸福をかけるということであった。そしてそれがいわゆるハイカルチャーとも交流しアヴァンギャルドを生みだし、サブとハイの区分を曖昧にする現象をうみ、こうした現象も世紀転換期の文化の多様性・複合性を表すものとなっていた。野外とか自然と結びついた裸体文化(Nacktkultur)、体操(Gymnastik)とか表現舞踏といういわゆるモダンダンスといった運動、野外活動と太陽の礼賛、若さの礼賛、そして身体の運動を中心としたパントマイム、影絵、ヴァリエテという具合に表現ジャンル

の拡大、衣装や食に焦点を置いた生活改善運動等々いろいろな動きが創造行為として発現した。これらが文化創造のあらゆる分野に入り込んで表現行為と表象の関係に作用していくという事態が進行した。サブカルチャーの隆盛をふくめて、総じてそこでは、哲学者のジンメルのことばをかりると「生という現象の、何ものにも還元できない、あらゆる認識と判断に先行する性格」(der irreduzible, allem Erkennen und Urteilen vorausgehende Charakter des Phänomens 'Leben')という認識が強化される。生に対立し、生を裁き、己自身を自己目的としてきた認識に対し、生に仕え、生を元気づけ、生を促進させる、生との親和性をもつことに思考の役割、知の役割がおかれる。特にサブカルチャーの領域で、わかりやすく顕著に現れるこの現象は、ビオスから一旦排除されていた「剥き出しの生」としてのゾーエーの働きを、生そのものの形式として解放し、いわば「ゾーエーのビオス」という領域を生じさせる行為といえた。身体という器の中で、身体を所有する主体をこえて、いわば生命体としてのヒトという即物的なレヴェルが機能する、言葉をかえると言語的な主体の段階に先立つような、身体・生命レヴェルが言語的なコミュニケーション以前の一種無意識的な力の伝播を実現する。「剥き出しの生」が近代社会の構制のなかに次第に含まれていくという過程があることは、アガンベンらが分析しているところであるが、それはつまり近代社会がこのアポリアを社会構成として内含していたことを意味している。芸術や知といわれるものが、このアポリアの中で、人間の実存の排除されざる自然性を、対象領域として出現させ、生との親和性によって自らを鍛えるとき、「よりまじに生きること」のために諸制限を破砕し、驚異的創造への努力の中で、生の新たな可能性を発見し作り出す。生に奉仕し、生を肯定することの中で、生は知を促進する能動的な働きとなり、知は生の肯定的な働きとなるそうした可能性に知の、そして芸術の本質が求められた。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①金子元臣、「生」の言説と初期トーマス・マン、言語文化共同研究プロジェクト 2008、査読無、2009、31-42

②金子元臣、「生」の言説と初期ホフマン・スタール、言語文化共同研究プロジェクト 2007、査読無、2008、31-42

③金子元臣、「生」と「学」と「知」、言語文化共同研究プロジェクト 2006、査読無、2007、11-22

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

: 金子 元臣 (KANEKO MOTOOMI)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
研究者番号：10081605

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし